
本日は「食草園が誘う昆虫と植物のかけひきの妙」にご来場いただき、まことにありがとうございました。

本来は私がこの場で直接、皆様にご挨拶するはずだったのですが、実は、直前にアイルランドで開かれました国際学会に招待され、このコロナ禍、久しぶりの海外の学会に出席をすまいました。その帰国直後にコロナ陽性が判明し、この場に伺うことができなくなってしまいました。代読という形でのご挨拶になりますことを、お許しいただきたく存じます。

さて映画をご覧いただいたのご感想は如何だったでしょうか。この映画は当研究館表現セクターの村田英克が監督し、当研究館のスタッフの手によって作られた、オリジナルの映画ですが、研究館の日常を描いて、ちょっとした映像詩の雰囲気を持つものに仕上がったのではないかと、思っております。

皆さまご存知の通り、世界では国連の指導のもと、SDGs という取り組みが大きく展開しております。「持続可能な開発目標」として17のゴールが設定され、わが国も強く押し進めております。それについて詳しく申し上げる時間はありませんが、私どもの誇りは、実はJT生命誌研究館は、それに先んじること30年も前から、このSDGsに掲げられた精神を掲げ、活動を続けてきたことであります。

「開発目標」などと言うと、とかくイノベーションなどという言葉に短絡しがちですが、人間の活動を自然の一部と捉え、昆虫などの小さな生き物や、植物を含めた生態系全体のなかで、自分たちを見つめ直すという視点を大切にすまいました。

生命誌研究館は、研究、表現、事務の3つのセクターから成っております。研究セクターには4つの研究室があり、チョウやハチ、クモやカエル、プラナリアなど、小さな生物を対象として、その行動や発生、進化などのユニークな研究を推進しております。

生命誌研究館が他の研究所や博物館、資料館と違うところは、このようなオリジナルな研究を、研究者のソサエティだけでなく一般社会へ還元しようとしている点であります。生命誌研究館のミッションは「科学的知の創造と、その社会への還元」であります。研究によって得られた成果を、一般の皆さまと共有してこそ意味があると考えております。

その実現のためには、それをいかに伝えるかが大切になってまいりますが、当研究館には表現セクターという部署があり、得られた「科学的知」をいかにわかりやすく皆さまに伝えるか、そしてそれを「表現」というレベルに高めて伝えるにはどうすればいいかを模索してまいりました。その一つの成果がいまご覧いただいた映画に表われていると感じていただければ、この上もないことです。

生命誌研究館のもう一つの大切なミッションは、当研究館は、決して学ぶだけ、科学的情報を得るだけの場ではないということにあります。私たちは生命誌研究館を、「**問いを発掘する場**」と考えたいと思っております。研究館にお出でいただければ、これまで知らなかったいろいろの知識を得て驚いていただけるものと思っておりますが、私たちは、その上で、さらに生命誌研究館に来て疑問を持っていただきたい。新たな問いを発掘していただきたいと願っております。

自然は、わかったと思ったところから、また新しい疑問が生まれ、謎を感じ、そしてその答えを知りたくなるほどに奥深いものです。今日の映画をきっかけとして、高槻のJT生命誌研究館へも是非足をお運びください。きっと自然の持つ不思議に感動していただけるものと思っております。

今日は、ほんとうにありがとうございました。

2022年7月23日

JT生命誌研究館 館長

永田 和宏
